第2回 みんゆう新聞感想文コンクール 最優秀・優秀作品

各部門の入賞者

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
橋本　奈瑠美（原町二小4年）
◆優秀賞
渡部　秀樹（田島3年）
中里　祐太（船引4年）
宮原　由気人（原町二4年）
◆入選
橋本　弘純（平野3年）
豊岡　桃香（桜の聖母学院3年）
大橋　智也（渡利4年）
赤間　祐芽（矢野目4年）
菅野　佑志（杉田4年）

【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
鈴木　啓太（蓬莱東6年）
◆優秀賞
永田　愛（森合5年）
青木　亨諭（坂下5年）
紺野　竜加（福島大付属6年）
◆入選
久間木　壱成（福島一6年）
本田　光（福島一6年）
黒津　ちはる（福島一6年）
佐々木ひかり（佐倉6年）
柳沼　祐亮（大島6年）

【中学生の部】
◆最優秀賞
八城　美和（桜の聖母学院1年）
◆優秀賞
武内　優（蓬莱1年）
本田　一紗（福島四3年）
宮原　理為智（原町二3年）
◆入選
遠藤　奈生（信陵2年）
土屋　晴義（郡山二2年）
柳沼　茜音（郡山六2年）
佐藤　佑香（福島二3年）
中野　紘成（郡山二3年）

【学校賞】
福島一小（福島市）
桜の聖母学院小（福島市）
郡山二中（郡山市）

大震災と向き合う

◆最優秀賞（小学3・4年生の部）
「感謝の心をもって」
原町二小4年　橋本　奈瑠美さん

七月二十三日は、私がしんさいのためにひなんしていたぐん馬県片品村から帰ってきて、初めての休日となった日だ。母が一枚の新聞を差し出した。「手を振り感謝三カ月」小学六年生の広野あみさんと四年生の諒君が、三カ月間一日も欠かさず、けい察や自えい隊の人に感謝の気持ちを伝えていたという記事だ。私がひなんしていた間にこんなことがあったんだと初めて知った。

「飯野町を通って、南相馬市にも来ていたかもしれないよ。」と母が言った。何十台もの車が来て、来る日も来る日もがれきを片付け、行方不明の人をさがし、支えん物を届け…。きつい仕事が続き、心も体もとてもつかれただろう。

でもそんな時、あみさんと諒君が感謝の気持ちを伝えてくれた。おかげで、働く人たちはつらい時に勇気がもらえたり、がんばる力となったりしたのだと思う。二人のしたことは、けい察や自えい隊の仕事と同じくらい大切なことだ。あみさん諒君、ありがとう。

そして私は、片品村でたくさんの人に助けてもらったことをあらためて思い出した。仲良くしてくれた片品小の友達、毎日おいしいごはんを作ってくれたふくたけや旅館のおじさんおばさん、そして、やさしくしてくれたたくさんの人達。私の心は、いろいろな人への感謝の気持ちでいっぱいになった。

私は、自分がこんなにたくさんの人達のおかげで生活しているんだということに気付いた。このことを忘れないで、感謝の心をもって毎日をすごしていきたいと思う。片品村の人達がしてくれたように、困っているだれかがいたら役に立ち、そしてあみさんや諒君のように、感謝の気持ちをきちんと伝えることができる人に、私はなりたいと思う。

◆最優秀賞（小学5・6年生の部）
「勇気を持って」
蓬莱東小6年　鈴木　啓太君

「フクシマ、フクシマ。」これは、サッカーベルギー一部リーグの試合中、日本人のゴールキーパー川島永嗣選手を挑発するために、相手チームのサポーターがコールした言葉です。

「ひどすぎる。」

ぼくは、この記事を読んで、いかりがわいてきました。同時に、この挑発に対して主しんに抗議した川島選手はすごいと思いました。

三月の大震災の後に起きた原発事故によって、福島の人達はとても苦しんでいます。自分の家に帰れない人や放射線を心配して県外にひ難している人。ぼくだって、大好きな外遊びができず、不安な毎日を過ごしています。ぼく達福島県民にとって、この「フクシマ」コールは、絶対に許せない行為です。

川島選手は、福島県出身ではありませんが、福島の人達のことを思って抗議してくれたのだと思います。外国のチームに入ることだけでもすごいのに、試合中に外国人の主しんに向かって抗議をするなんて、川島選手は本当に勇気のある人だと思いました。

川島選手の抗議によって、その後、相手チームは謝罪をして、日本への募金活動を始めたそうです。川島選手の勇気ある行動が、相手の心を動かしたのです。

ぼくは、嫌なことがあっても、いざとなると弱くなってしまい、相手に言い返すことができませんでしたが、川島選手から、正しいことは勇気を持って主張することの大切さを学びました。「フクシマ」コールは、とても残念なことでしたが、日本人の中にある真の勇気がある人がいたこと、そして、福島のことを応援してくれる人がいることを知り、とてもうれしくなりました。ぼくも川島選手のように勇気ある人になりたいと思います。

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「あした新聞」
田島小3年　渡部　秀樹君

「おじいちゃんが新聞にのってるよ。」お母さんが、おじいちゃんがしょうかいされた記事を読んでくれました。お母さんの実家は、大工さんです。おじいちゃんとおじさんが、たくさんの大工さんと新しい家をたてたり、リフォームをしていました。でも原発事故のひなんで、仕事にならないと言っていました。新聞には、おじいちゃんがかせつじゅうたくを作っているところが、カラー写真で大きくのっていました。夜、いい坂にひなんしているおじいちゃんに電話をしました。

「おじいちゃんがひなんしている福島はね、夏はあつい、冬もきびしいからかせつもきちんと作れば、ひなんしている人も生活が楽になるんだ。おじいちゃんもがんばるから秀樹も学校がんばれな。」と、元気な声で話していました。ぼくは、おじいちゃんから元気をもらいました。

ぼくは、原発事故で南相馬市から南会津町にひなんしています。四時間くらいかけてひなんして来ました。友だちとは、とつぜんはなればなれ、ほうしゃのうのえいきょうで外にあまり出られないので野球は出来ないし、さむいし、引っこしも四回もしました。今は、友だちがふえて学校が楽しくなりました。家族もバラバラ、不安だったぼくに友だちは、とてもやさしくしてくれた。そのことは、ぼくはぜったいわすれません。

あした新聞は、いろいろな人がのっています。しんさいや原発のひなんでくろうしている人もえ顔でがんばっているようかいされています。あした新聞を毎日見ていると、ぼくもがんばろうと思います。これからもえ顔でがんばっていて、ぼくたちに元気をとどけて下さい。

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「野球でつながる絆」
船引小4年　中里　祐太君

ぼくは、スポーツ少年団で野球をしています。だから新聞を見る時は野球の所を見ます。そうしたら、川内村の盆野球という記事がのっていました。写真を見てみたら、今年川内村からぼくのチームに入った先ぱいが写っていたので、この記事を読んでみました。

川内村では、昔からお盆に、盆野球をしていることを知りました。お盆や成人式で帰って来て顔を合わせやすいからだそうです。でも今年は原発事故で全員ひなんしていて出来ないかと思われていましたが郡山で百人以上の人が集まっておこなわれたという記事でした。

その写真を見ると、大人から子どもまでみんな笑っていました。川内村は今は大変だけど、久しぶりに会って野球が出来て本当に、楽しかったんだなと思いました。

そして、川内村のひなんがなければ先ぱいは、赤いユニフォームを着て野球をしていたんだなと初めて知りました。

ひなんして、チームの人とはなれて一人でちがうチームに入って、野球を続けるせんぱいはすごいなと思います。今は、ずっと前から一しょにやっているみたいに仲良くしています。ぼく達もグラウンドにかせつ住たくがで来てホームグラウンドがなくなって大変だけどぼくも野球をがんばろうと思います。

盆野球は、はなればなれになっている人をつなぐ大切な行事なんだなと思います。川内村の人達が川内村で笑って盆野球が出来る日が早く来ると良いなと思いました。

▲ 部門ごとに最優秀賞などを選んだ審査会

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「力をあわせて」
原町二小4年　宮原　由気人君

「お父さんの仕事場は、この写真の少し上にあったんだよ。」と新聞を指さした父の言葉に、ぼくはとてもびっくりしました。そして、漁船や電車がたおれるくらいの津波だったことを新聞の写真を見て初めて知りました。記事では三カ月後の写真と比べていましたが、八月が終わろうとする今も、電車は駅にとまったまま動かないし、道路ぞいの田んぼには船がいくつも残されています。また、原発の話も毎日のように新聞にのっているので、ぼく達が住む所はこれからどうなるのだろうと悲しくなりました。そんな時、「はやぶさ」の記事の中で「この偉業が成し遂げられたのは、失敗を恐れずに挑戦したことと、チームメンバーの『決してあきらめない』という不屈のこころがあったからです。」と坂本さんが言っているのを読みました。

ぼくはこれを見て、原発の問題も同じだと思いました。問題を解決するために、たくさんの人が色々な方法を考えています。水で洗ったり、土の表面をけずったりすることのほか、放射性物質で汚れた土を「ひまわり」できれいにする研究、セシウムを食べる微生物を使う研究などが新聞にのっているということを父に教えてもらいました。また、少しでも安全な町にするために、暑い中長ズボンで除染をしている人たちの記事も見ました。とても大変なのに、もとの町にすることをあきらめていません。海も土も汚れてしまったといわれていますが、みんなで知恵を出し合って、あきらめずに解決していけば「はやぶさ」のように、どんなむずかしい問題も解決できると新聞を読んで思いました。

ぼくも「あきらめないこころ」を大切にして、いろんなことに立ち向かえる人になれるようにがんばっていこうと思います。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「背中押され 大舞台へ」
森合小5年　永田　愛さん

「負けないでもう少し最後まで走り続ける」

私は涙が止まらなかった。何度も何度も心の中で、この歌のこのフレーズを歌い続けた。むねがとてもいたくなった。

六月二十一日の朝刊。私は一枚の写真に目がとまりました。一枚目は、ひとりの女の子が自宅跡で海に向かい泣きながらトランペットをだきしめている写真です。記事を読むと、震災から二カ月後、陸前高田市の佐々木瑠璃さん十七才は、津波で母や祖母を亡くし、その祖母が買ってくれたトランペットで母が大好きだったＺＡＲＤの「負けないで」をふいていたというものでした。いったいどんな気持ちでふいていたのでしょうか。

震災は私達の大切な宝物をたくさんうばいました。人も住む場所も、そしてあたり前だった生活もうばっていきました。私達福島の子ども達は学校でおもいっきり走ったり、プールで泳いだりすることさえできません。この写真を見ていると、瑠璃さんの悲しみと福島の子ども達の悲しみが重なりました。

そして二枚目の写真。瑠璃さんはオペラシティの舞台でトランペットをふいていました。ひとつの記事が音楽家の目にとまり、瑠璃さんを大舞台へと連れていってくれたのです。この時瑠璃さんの涙はきっと希望の涙だったのでしょう。弱虫な私をはげますように、瑠璃さんのトランペットは私の心の中で「負けないで」と歌ってくれました。

私はこの記事で瑠璃さんといろんな話をした気がします。しおれてしまった私の心に勇気をあたえてくれたのです。もっともっと強くなろう。今度は私がだれかに元気をあげよう。この記事はいつのまにか私の大切な宝物になりました。そして今でも瑠璃さんのトランペットが「負けないで」とかなでる時、私は心の中で「負けないぞ」とさけんでいるのでした。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「会津ごう雨について思う事」
坂下小5年　青木　亨諭君

「しん水、土砂くずれ拡大『七千人ひなん指示・かん告』」という一面の大きな見出しを見て、いったい何が起きたのかびっくりしました。すぐに新聞を読み、父にどういうことかたずねると、七月二十九日に会津地方、大雨で、ひ害が大きくなったそうです。ぼくが住んでいる会津坂下町でも、ひなんかん告が四百三十二人に出されました。

新聞の大きな写真は、ぼくにはまるで空想をかいた絵のように見えました。本物の写真だと思うととてもこわくなりました。川の水に流された橋、稲が実りはじめた田んぼに流れこんだ水、水びたしでドロドロになってしまった民家。道がなくなり、電話や電気が使えず、家の物が流されて、明日からどうやって生活すればいいのか困っている人がたくさんいます。

会津地方は、昨年くれから、災なん続きです。何十年ぶりかの大雪がふりました。それから、一生忘れられない三月十一日の東日本大しん災のひ害。そして、今回の大雨。両親は、災なん続きで、「人間、自然と向きあって生きていくのはつらいなあ。」と言っていました。ぼくもそう思いました。両親のこまった顔を見てつらくなりました。自然が起こす力は、良いこともあるけれど、力が大きすぎると人々を苦しめるんだということがわかりました。

苦しんでいる人たちが早く立ち直れるよう、ぼくに何かできることはないかと考えています。ぼく一人では小さな力だけど、助けたいと思う人が集まれば、大きな力になるはずです。どんなことがあっても、手をとりあって乗りこえ、自然の大きな力に負けずにがんばっていきたいです。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「ほんとうの春は…」
福島大付属小6年　紺野　竜加君

ぼくは、今年の二月頃からなるべく新聞を読むようにしていた。でも、全部読むのはちょっと難しいので「編集日記」を読むことにした。なぜなら、季節のことや行事のこと、注目の出来事について分かりやすくまとめてあるので、文章や漢字の勉強になると思ったからだ。何より「へぇー」と思う話がいっぱいで面白い。そして、心にグッときた日の記事は切り取っておいた。

五月十六日の記事を今まで数回読み返した。内容を簡単に説明すると、ある小学校のテストで「氷が溶ければ□になる」という問題が出され答えは水。先生はそれ以外の答えを×にしたが、ある児童の答えで大騒ぎになったそうだ。その答えは「春」。ぼくは、思わず「うん、うん」とうなずいた。その後記事は、原発の話へ。震災以来ほとんど毎日、地震と原発に関する内容の編集日記になった。ぼくは、「またか」と沈んだ気持ちになる。大切なことを伝えていることが分かっていても、あの地震とその後のつらい日々が思い返される。

小学校最後の今年の夏は、思いっきり夏を楽しめなかった。大好きなプールには入れなかったし、外で遊ぶこともしなかった。転校してしまった友達や県外に避難していた友達も多かった。暑さと節電が思い出の夏だった。

もうすぐ秋、季節はどんどん変わるけれど悲しい現実が終わった時、ほんとうの春がくると思う。ほんとうの夏も楽しめる。そして「氷が溶けると春になる」という答えが、笑って○にしてもらえる気がする。

ぼくは、これからも編集日記を読み続け、今起こっていることを知りながら、本当の春を待ちたい。